

# 大学生のビブリオエッセー

産経新聞 令和元年（2019年）9月27日（金）

大阪府東大阪市 勝山<sup>み</sup>実<sup>ゆ</sup>優 (20)

【檸檬】

梶井基次郎

2019. 9. 27

失礼ながら、梶井基次郎という男は、変態だ。私が初めて『檸檬』を読み終えて感じたものは、それだった。

私たちの世代でレモンといえば米津玄師だけど、一昔前は「檸檬」だったのか。この漢字も普通じゃない。

「握っている掌から身内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快いものだった」「私は何度も何度もその果実を鼻に持って行っては嗅いでみた」「その産地だというカリフォルニアが想像に上って来る」…。

「不吉な塊」を抱いて悶々としていた作家が果物屋の店先で見つけた檸檬にふと癒やされる場面。なでまわしながら、探しものはこれだった、なんて。ほら、変態と言わざるを得ないだろう。

最後には京都の丸善で、積

## 弾けるイエロー 湧き上がる妄想

み上げた本の上へ爆弾に見立てた檸檬を残して、何喰わぬ顔で外へ出る。

「あの気詰りな丸善も粉葉みじんだろう」

檸檬を通して、梶井の頭の中で次々と湧き上がる妄想が実に奇妙である。紡錘形の果物に寄せる偏愛。それを読む私も、梶井の奇妙な物語にはまっぴい。

読み進むにつれ、頭の片隅に『黄色』がチカチカして仕方ない。これもまた梶井の術中にはまっているのか。『檸檬』には色硝子、琥珀色や翡翠色の香水壺まで色彩が背景にたくさん登場する。

その淀みをかき消すような黄金色の檸檬。たびたび出た否応にも意識させるのだ。気がつくとも私も梶井と同様、檸檬に魅せられた一人となっていた。